

週刊メッセージ “ユナタン” 2

～ 種の会方式の5歳児の組体操の意義 ～

平成27年10月7日 片山喜章

9月30日に引き続き、時節柄、運動会種目から「組体操」の練習場면을題材に「教育の1つの方法」についてお伝えします。※ 10月3日にもうすでに終わっている園があります。

5歳児の「組体操」も「バルーン」同様、全園の定番種目であり「練習中も、当日も、誰と組むか相手も役割も固定して決めない」「その場で子どもたち自身が判断して、形をつくる経験を重ねる」この練習方法と本番の姿は、法人全体のシンボリックな教育観であると言えます。

昔むかし、私は、組体操が嫌いでした。小中学校の生徒のように、幼児がびしっぴしっと言われたことを演じる姿に、どこか幼児にふさわしくない、保護者受けするための非教育的な取り組みである、と50園を超える幼稚園の体育指導（前職）にかかわってきて実感していました。

幼稚園の先生たちは、礼儀正しく、熱心で、(若くて)人柄の良い人が大半でした。けれども、いざ組体操の練習になると“豹変”します。指示、命令、怒鳴り混じりの励まして、子どもたちはピリピリ感、保育者はカリカリ感に包まれます。『なんだろー、このギャップは？ なんとかせなあかん』と共に練習に参加しながらも、常に胸を痛め、“対案構築”に挑んできました。

けれども、本番では見事な姿を披露して辛かったことが報われます。感慨ひとしおです。

保護者も先生も、涙、涙に浸ります。その姿を見て子どもたちは“達成感”を味わいます。

これが伝統的な組体操（運動会）の姿です。“辛いから教育的！？”と考える保育者、保護者が多く、それは風土と言ってよいでしょう。この従来型の練習場面だけを見て、昔の私のように「組体操は苦痛をあたえるヤラセだからダメ」と〇×思考で眉をひそめる学者やインテリ園長が数多くいます。種の会の工夫された練習法と本番の姿は伝統的な日本の教育に依拠しつつ、主体性を発揮する、かつてない新しい教育法（練習過程）であると、職員一同、自負しています。

まず、2人、3人、4～6人、「仲間集め」をします。仲間集めは、子ども任せですから、偏る場合もあれば、毎回、異なる場合もあります。練習回数を重ねると、誰と組んでも気にならなくなったり、何となく固定化する場合もあります。そこはお任せでよい部分です。毎回、相手を変えてほしいと願うのはよいですが、それを目的にし、指示するのは教育ではないと考えます。

そして、集まった仲間で「形作り」に挑みます。「上だ、下だ」と毎回、モメて葛藤や時には理不尽さを味わいながらつくりあげる経験。これが子どもをタフにし(モメながら完成品をつくるので)、規範意識を主体的に培う下地作りになる基礎経験であると見通しています。(裏へ)

昨年のA園は、「1人技」「2人組」「3人組」「6人組」の内容をそれぞれ子どもが委員会を作って担当委員で形を考えて決めて、それらを合体させて完成品をつくりました。着想はグッド！

しかし、第一リハを見た私の感想は「長い！」でした。特に「1人技」が多い、長い。私が、大幅カットを担任に求めると、2人の「1人技委員」が事務室に来て、椅子に座り机に両腕を置いて私と折衝しました。大幅カットを求める私に、委員の1人（女兒）は厳しい顔になり、私も緊張してしまいます。「これは譲れない」と彼女は譲れない「形」を次々に主張します。

こんなふうに1人技委員として自分たち（2名）が主体者になると、決めた事に対しては、子どもといえども、思い入れが強くなります。その女兒は私に対して本気で憤慨していました。

しかし、『2品の似たような「形」を（1つカットして）1品にした方が、その1つは輝くと思うよ』と説得すると、「自分たちが主体者として発案した過程」があったからこそ、良い作品にしたい気持ちも強くはたらい、私（他者）の見解を素直に傾聴する度合いも高くなったのがわかりました。大人世界のガンコさと違い、子どもは素直に良し悪しの観点で物事を見て考える力を持っています。まさに幼児の特性であり、その特性に寄り添って子どもと応答するスキルやマインドを会得するのが教育者の努めだと、と考えさせられました。最後は、納得して私と握手をして、クラスに戻って彼ら自身で再構成会議をしたようです。（担任は高みの見物でした）

この他にも各園の本番では、様々なハプニングがありました（一部紹介）。

「おやま」「おおぎ」と子どもが次々に名称を言って全体が「形づくり」をしていると、ある子が8人組の「形（ツボ）」をすっかり言い忘れて間ができました。全体が“どうしよう状態”になりました。担任は祈るような気持ちです。すると、機転をはたらかせた別の子がタイミングよく「ツボ」と言って、何事もなかったように「ツボ」ができた、そんなことがありました。

3人組の「タワー」をつくる際、クラス人数上、2人組が1つできます。そんな時は2人なりの「タワー」をつくります。5歳児の中では了解されている事でした。ところが5歳児の組体操に憧れて練習をよく見ていた4歳児が、本番、突然、園児席から飛び入って、その2人の中に入って、2人をおうまにして自分が上がってポーズ。会場は驚きと笑いの拍手で包まれました。

全員による最後の「大タワー」づくり。当日、欠席者がいたので人数が合わない。3段目が2人、1段目が8人、では2段目は・・・足りない、どうする、ああだこうだと本番最中に、話し合いながら試行する子どもたち。3分経過、観客席のイライラ感が膨張します。4分経過、ある子が園児席に戻ってしまい他の子が連れ戻す・・・5分後、ようやく完成。事後、保護者の賛否は真っ二つ。しかし月日が経てば、みんな絶賛。クラス集団の自己解決力に万歳、万歳、万歳！